

定穴法からみた風水景観

—韓国農村集落における風水景観に関する研究 その8—

正会員 ○山口 泰佑 1* 同 佐藤 誠治 2**
同 姫野 由香 3*** 同 樋口 夏希 1*

農村計画
韓国

景観・環境資産
集落調査

農村景観・集落景観・自然景観
風水

1. 研究の背景と目的

風水は、地形と人間の営みを結び付ける極めて環境重視の作法であり、自然と人間の調和ある環境形成を目的としている。また、そこに生まれる景観には安息感があると考えられる。現代の都市では地形と人間、または自然と人間の関係が希薄になり、自然と共生できる景観が失われつつあるため、風水を現代において追及することは有意義と言えるのではないだろうか。

著者らは、その1から7の既往研究において風水理論の浸透度や、今まさにその景観が失われようとしている現状などから調査対象地を韓国南部地域に絞り、風水理論に基づいて山や川との関わりを持って配置された集落が生み出す独特の景観を「風水景観」と定義して研究を進めてきた^{1)~4)}が、その8ではこれまでの現地調査で得た情報をもとに風水原理の一つで陰宅や陽基の位置を定める方法である「定穴法」の観点から風水景観の特徴を明らかにすることを目的とする。

2. 定穴法からみた集落景観

定穴の方法は、局を成していると思われる地点の周辺の前後左右の山勢と、水局による真穴の可否を判断するために用いられるものである。そのため、非常に具体的に18種類の判断方法が示されており、景観に対する風水関与の事実関係の把握をする上で、非常に有益な知見が得られた。しかし、中には細かい地勢について論述されているものもあり、全てに対して検証を行うことは不可能であった。そこで、本研究では地勢の判断が分かりやすい方法として特に(1)朝案定穴法、(2)分水、合水定穴法、(3)天心十道定穴法、の3つに着目して考察を行うこととした。

(1) 朝案定穴法

『撼龍經』には、「真龍に穴があるが、探し当てるのは難しい。もっぱら朝山を観察し、朝山が高ければ高いところに定穴し、低ければ低いところに定穴すべし」とある。『元気歌』には「秀麗な山が左にあれば穴も左にあり、右にあれば穴も右にある」とあるが、これがすなわち朝山によって穴を定める方法である。

上記の説明から、すなわち朝案定穴法とは、朝山・案山が高く秀麗な山であることを確認する方法と解釈でき

る。朝山・案山は集落の朱雀方向にあるとされる山の名前であり、集落から見て遠い山が「朝山」、近い山が「案山」である。背山は必須項目として、それよりも朝山・案山の形を重視した定穴法がこの朝案定穴法なのである。まず本研究の対象集落の中で、主山よりも朝山・案山が特徴的であった集落は屯洞(ドゥンドン)である。屯洞は主山が集落から見えずらく、その代わり、朝山・案山が非常によく見える集落であった。この点から、屯洞は朝案定穴法によって選定された集落であると考えられる。風水景観を捉える上で、朝山・案山の特徴を把握することも重要であるといえる。(図2.1-2.2)



図 2.1 集落と山の位置関係



図 2.2 集落内から見た朝山・案山

(2) 分水, 合水定穴法

龍脈を観察すると「八」字の形に水が分かれ、下流で再び合水するところがあるが、ここは陰陽の度数が変わるところであるため、生気が集中し真穴が融穴する。この時、分水するのみで、下流の合水がない場合は陰陽の度数が変わることができず、局を成すこともできない。また、上流部に分水がなくても、龍虎水が左右から囲みながら合水する場合は可とされる。

分水・合水定穴法に適合する集落は、龍山（ヨンサン）であると考えられる。ここは明らかに分水・合水定穴法の適用が伺えるが、分水の原理によると龍山を流れる川の上流の水は分水しておらず、合水を繰り返して、龍山に至っているため分水の原理とは一致しない。しかし、上流部に分水がなくとも、青龍・白虎の水が囲みながら合流する場合は可とされることから、図 2.3 より集落の青龍・白虎方向に川が流れ、朱雀の地点で川が合水している龍山は分水・合水定穴法によってつくられた集落であるといえる。

これを特徴的に表わす景観が図 2.4 であり、集落南の合水地点から玄武方向を撮影した写真である。

(3) 天心十道定穴法

天心十道とは、穴を中心として前後左右の呼応する山が十字のかたちを成すものをいう。この時、穴の後を蓋山、穴の前を照山、両側を左右夾山という。この四つの山が正確に十字を成して相応すると四応といい、吉格とされ、その交点に作穴することになる。

天心十道定穴法について適合する集落でも「龍山」が考えられる。龍山では、集落内部から四神方向に向けた写真が撮影されており、いずれの写真も高大な山を写している（図 2.5）。集落の四方向に高大な山が聳える立地条件は、上述した天心十道定穴法の理論と整合するので天心十道定穴法の好例であると考えられる。

しかし、図 2.3 で龍山の周辺の地勢をみると、必ずしも山のピークを結んだ線は十字を成さないため、天心十道の理論とは整合しない。しかし、景観的な観点からみた場合、集落の四方向には高大な山がそびえる景観が確認でき、これは十字を成す地勢を想像させる。そのため本研究ではこれを天心十道定穴法の景観と考察する。

3. 総括

本研究では、風水理論の一つである「定穴法」に絞って理論についての考察を進めたのち、韓国農村集落の現地調査で得られた写真をもとに景観と関わりがあるかを明らかにした。この結果とともに定穴法の他の 15 の理論も調査での重要な観点であることとし、今後さらなる調査を行って風水景観への理解を深めていく。



図 2.3 龍山集落周辺地形



図 2.4 集落の合水地点



玄武方向



朱雀方向



青龍方向



白虎方向

図 2.5 集落内から四神方向を見た写真

【参考文献】

- 1) 野口浩平・佐藤誠治・姫野由香・山口泰佑：「韓国農村集落における風水景観に関する研究 その1 一風景写真による景観分析一」, 日本建築学会九州支部研究報告, No49, pp.301-304, 2011.3 他 2~7
- 2) 渡邊欣雄・三浦國雄編：「環中国海の民俗と文化4 風水論集」, 凱風社, 1994
- 3) 村山智順：「朝鮮の風水」, 朝鮮総督府, 1931年
- 4) 「韓国の風水思想」 崔昌祚 人文書院

1*大分大学大学院工学研究科博士前期課程

2**大分大学工学部福祉環境工学科・教授 工学博士

3***大分大学工学部福祉環境工学科・助教 博士(工学)

1* Graduate Student, Oita Univ.

2** Professor, Dept. of Architecture, Faculty of Eng, Oita Univ. Dr.Eng

3***Research Associate, Dept. of Architecture, Faculty of Eng, Oita Univ., Dr.Eng